

目次

まえがき	i
本書を読まれる前に	xi
第1章 序論	1
1.1 はじめに	1
1.2 多義とは	6
1.3 従来の多義研究の論点	7
1.3.1 中心義	7
1.3.2 意味と意味のつながり	12
1.3.3 実験すれば分かるのか	23
1.3.4 動機付け	28
1.3.5 同じ意味か別の意味か	31
1.4 意味と使用	37
1.4.1 意味の水源地モデル	37
1.4.2 使用基盤モデル	40
1.4.2.1 ルールとリストの共存	40
1.4.2.2 使用基盤モデルと頻度	44
1.4.2.3 使用基盤モデルと合成性	47
1.4.2.4 使用基盤モデルは創造性と矛盾するか	50
1.5 第1章まとめ：使用基盤モデルと多義	55

3.2.3	空間的近接性の by : 分析	104
3.2.4	空間的近接性の by : まとめ	112
3.3	〈過ぎ去り〉の by	112
3.3.1	〈過ぎ去り〉の by : 概説	112
3.3.2	〈過ぎ去り〉の by と時空間メタファー	116
3.3.3	空間的な〈過ぎ去り〉の [V by (NP)] 構文	117
3.3.4	時間的な〈過ぎ去り〉の [V by] 構文	124
3.3.5	〈過ぎ去り〉の by : まとめ	126
3.4	〈立ち寄り〉の by	127
3.4.1	〈立ち寄り〉の by : 概説	127
3.4.2	〈立ち寄り〉の by : 事例研究 (will be by)	137
3.4.2.1	will be P 構文	138
3.4.2.2	will be by	145
3.4.3	〈立ち寄り〉の by : まとめ	147
3.5	第3章まとめ	147

第4章 手段 149

4.1	手段 : 概説	149
4.2	位置コントロール用法	151
4.2.1	記述 (可算性の検討を除く)	151
4.2.2	記述 (可算性の検討)	154
4.2.3	身体部位所有者上昇構文の構文ネットワーク	155
4.3	連結用法	158
4.3.1	記述 (可算性の検討を除く)	158
4.3.2	記述 (可算性の検討)	162
4.3.3	位置コントロール用法との関係	163
4.4	経路用法	165

4.4.1	記述(可算性の検討を除く)	165
4.4.2	記述(可算性の検討)	169
4.4.3	連結用法との関係	171
4.5	乗り物用法	172
4.5.1	記述(可算性の検討を除く)	172
4.5.2	記述(可算性の検討)	174
4.5.3	経路用法との関係	175
4.6	メッセージャー用法	176
4.6.1	記述(可算性の検討を除く)	176
4.6.2	記述(可算性の検討)	178
4.6.3	乗り物用法との関係	178
4.7	第4章まとめと可算性選択の原理	179
第5章 差分・単位		183
5.1	差分・単位：概説	183
5.2	差分・単位：各用法の記述	184
5.2.1	差分用法	184
5.2.2	単位用法	188
5.2.3	N by N 構文	193
5.2.4	乗除用法	198
5.2.5	寸法用法	198
5.3	差分・単位：用法と用法の関係	199
5.3.1	単位用法と他の用法のつながり	199
5.3.2	N by N 構文と他の用法のつながり	202
5.3.3	乗除用法と他の用法のつながり	206
5.3.4	寸法用法と他の用法のつながり	208
5.3.5	差分用法と他の用法のつながり	208

5.4 言語使用を可能にする拡張	210
5.4.1 N by N 構文からの拡張：概説	210
5.4.2 N by AN 構文の記述	213
5.4.2.1 N by AN 構文の記述：ジャンル	213
5.4.2.2 N by AN 構文の記述：意味と形のミスマッチ	215
5.4.2.3 N by AN 構文の記述：ストレスパターン	216
5.4.2.4 N by AN 構文の記述：形容詞スロット	216
5.4.2.5 N by AN 構文の記述：転移修飾との相性	220
5.4.3 N by N 構文から N by AN 構文への拡張の仕組み	222
5.4.3.1 予想の裏切りへ向かう拡張	222
5.4.3.2 描写性を高める拡張	224
5.4.3.3 この拡張が主にフィクションで起こっているのは偶然か	228
5.4.3.4 N by AN 構文はなぜ英語らしい表現と感じられるのか	229
5.5 第5章まとめ	235
第6章 結 語	237
参考文献	241
用語索引	250
英語表現索引	253
人名索引	255

第 1 章

序 論

1.1 はじめに

英語前置詞 **by** は、以下に示すように、非常に多様な用法を持つ多義語である。以下に例示したのは本書で扱う用法のほんの一部である。

- (1) **By** ten o'clock, however, he still hadn't made a move for the front door.
(Paul Auster, *Leviathan*)
だが、十時になってもサックスはまだ玄関に向かおうとしていなかった。
(柴田元幸 (訳) 『リヴァイアサン』)
- (2) Danny: Chicago? Didn't they have a really big fire there?
Vicky: It was over a hundred years ago. I'm sure it's out **by now**.
(*Full House*, Season 5, Episode 15, Play It Again, Jess)
ダニー： シカゴ？ あのすごく大きな火事があったところ？
ヴィッキー： それ 100 年以上前よ。さすがにもう消えてるでしょ。
- (3) All right, Becky, how does this sound? A romantic moonlit stroll **by** the lake.
(*Full House*, Season 2, Episode 21, Luck Be a Lady, Part 1)
よし、ベッキー。こんなのはどうだ。月明かりに照らされて、ロマンチックに散歩するんだ。湖のそばを。
- (4) I sat back and watched a bus snort **by**. (David Gordon, *The Serialist*)
私は動かず、バスがゴーッという音を立てて走り去るのを見つめた。
- (5) He definitely wants him back right away. He'll be **by** tomorrow.
(映画 *As Good As It Gets*)
彼はどうしても犬をすぐに返してほしいらしい。だから明日そっちに

第2章

時 間

2.1 時間：概説

本章では、by の時間用法を記述する。by の時間用法は、従来、日本語の「までに」と対応づけられたり（小西 1976: 264）完全に同一視されたり（山田 1981）してきたが、実例を観察すればすぐに分かる通り、このような説明は by の実態を適切に捉えたものとは言いがたい。

本章の大まかな論展開としては、まず 2.2 節で by five o'clock や by the time she came back などのスキーマとして認定できる by [TIME]¹ を記述し、続く 2.3 節では一見そのスキーマの単純な事例にすぎないように見える by now が、スキーマの [TIME] スロットに now を入れるだけでは予測不可能な振る舞いを示すことを指摘する。これにより、「スキーマを習得すれば事例の記憶は不要である」という考え方は誤りであり（1.4.2.1 の「ルールとリストの共存」を参照）、事例とスキーマの両方が話者の頭の中で記憶されているという使用基盤的な発想をすべきであることを論じる。

2.2 by の時間義²

2.2.1 by [TIME] に関する誤解

おそらく多くの中学・高校で by [TIME] の意味は「[TIME] までに」であ

¹ 以下では by の補部となる名詞句を [TIME] と表記することにする。

² 本節は平沢 (2014c) のダイジェスト版である。本節の内容の厳密な論証過程、理論的な位置づけ、学術的価値などに関しては、平沢 (2014c) を参照されたい（インターネットで閲覧可能）。書き換えに際しては、本書全体における by [TIME] の位置づけを理解するのに必要十分な情報が残るよう心がけたつもりである。

第3章

空間

3.1 空間：概説

英語の前置詞の空間義は約30年に渡って盛んに研究されてきた。overに関してはBrugman (1981), Lakoff (1987), Dewell (1994), Tyler and Evans (2003), inに関してはVandeloise (1994), throughに関してはBenom (2007, 2014, 2015), upとoutに関してはLindner (1981), acrossに関してはTaylor (2003a), などに詳細な記述が見られる。しかし, byの空間義に関しては「byは空間的な近接性を表すことができる」程度の記述しかなく, それがどのような近接性なのかという点に関して踏み込んだ議論を展開しているのは, 管見の限りでは, 3.2.2で紹介する嶋田(2010)とLindkvist (1976: 265–274) だけである。3.3節で扱う〈過ぎ去り〉のbyや, 3.4節で扱う〈立ち寄り〉のbyにいたっては, 詳細な記述は全くなされていまいと云ってよいだろう。本章は, byの空間用法を, 〈空間的近接性〉のbyと〈過ぎ去り〉のby, 〈立ち寄り〉のbyの3つに大別し, それぞれに関して, 先行研究で行われてこなかった詳細な記述を提示する。

本章で扱うbyの用法は, しばしば, 丁寧な記述なしに時空間メタファーが成立する前置詞の例として挙げられる。しかし, 3.3節で見ると, byに関しては事はさほど(つまり, 時間用法と空間用法があるからといって, 即座に時空間メタファーが成り立つと言い切れるほど)単純ではない。

空間用法を3つに分けることに関して, 全て空間的近接性という単一の観点から論じればよいのではないかという反論もあるかもしれない。実際, 次のように指摘する言語学者もいる。

第4章

手段¹

4.1 手段：概説

by は、様々な用法において手段「…によって」の意味を持つ。

- (1) a. Why don't we thank Michelle **by** clapping our hands?
 (*Full House*, Season 3, Episode 16, Bye, Bye Birdie)
 拍手をしてミシェルにお礼しましょうね。
- b. What do you expect to prove **by** this bit of nonsense?
 (*Columbo*, Episode 7, Lady in Waiting)
 こんな下らない芝居で何が証明できるっていうのよ。
- c. [...] several people come up and draw me **by** my naked arm and tell me first how moved they were by the presentation.
 (Rebecca Brown, "The Joy of Marriage")
 [...] 何人かこちらにやってくる。そして、ノースリーブの私の腕を引っぱり、まずは「プレゼンテーションに感動した」という話を始める。
- d. [...] they hang him **by** the ropes to the central pole [...] (COHA)
 [...] 彼らは彼をロープで中心の柱に吊るし [...]
- e. I went down **by** a different staircase, and I saw another "Fuck you" on the wall.
 (J.D. Salinger, *The Catcher in the Rye*)
 別の階段を降りて行くと、また壁に「ファックユー」と書いてあっ

¹ 本章は平沢 (2013c) とほぼ同内容であるが、比較的大きな変更を含む。

第5章

差分・単位¹

5.1 差分・単位：概説

第5章では、筆者が差分用法、単位用法、N by N 構文、乗除用法、寸法用法と呼ぶ by の5つの用法の記述を行い(5.2節)、その用法間の関係について考察する(5.3節)。これらの用法をあわせて差分クラスターと呼ぶことにする。差分クラスター内の5つの用法は、互いに関連しつつも1つからもう1つが予測できるようなものではなく、結局のところそれぞれの用法についての個別知識を持っていると想定せざるをえないことを論じる。

本章が他の章と大きく異なるのは、言語使用を可能にする意味拡張について考察する点である(5.4節)。これまでの章では、拡張後すでに定着してしまった表現や構文を扱ってきたため、「かくかくしかじかの意味拡張を発話の場で起こしているおかげでこの構文は使用可能になっているのだ」という趣旨のことは全く言えなかった。しかし、5.4節で見るN by AN 構文(Aは形容詞 Adjective)は、文学など限られたジャンルで稀に使われ、特殊な表現技巧という印象を与える構文で、英語話者の口語知識として完全には定着していないものであるため、拡張元の構文(N by N 構文)とのつながりが密接に感じられる。それどころか、5.4節で詳しく論じるように、N by AN 構文を使用するためには話し手がN by N 構文を知っていること—より正確には、聞き手がN by N 構文を知っていると話し手が思っていること—が必要なのである。したがって、N by N 構文からN by AN 構文への拡張は言語使

¹ 5.1節, 5.2節, 5.3節は平沢(2013b)を発展させたもの、5.4節は平沢(2015b)を大幅に発展させたものである。

第6章

結 語

本書が立てた問いは、現代英語母語話者の by の使用を可能にしているのはどのような知識なのか（言い換えると、あなたが英語母語話者だったとして、あなたが他の英語母語話者たちと同じように by を使用できるようになるためには、by に関してどのような知識を持っていなければならないのか）というものであった。この問いに対し筆者は、by の実例の分析を通じて、「by をどのように使うと（たとえばどのような単語と一緒に使うと）どのような内容が伝達できるのかを知っているからだ」という答えを導き出した。これが本書の大きな流れである。

しかし本書が何らかの学術的意義を持ちうる範囲は、英語という特定の言語の by という特定の単語に限られるわけではないと思われる。最終章にあたるこの第6章では、本書が by を越えて持つ（と筆者が願っている）意義を3つ指摘したい。

第一の意義は、一般化を拒む「きれい」でない大量の言語事実をありのまま記述することを通じて、言語モデルの妥当性を比較検討したことである。言語は、細かく見れば見るほど、深く考えれば考えるほど、一般化を拒む困った事実には溢れているのが実情である。そうした事実を例外とするようなモデル—「きれい」なものしか正面切って扱えないモデル—は言語モデルとして欠陥を抱えていると言わざるをえない。本書の記述を踏まえれば、使用基盤モデルはそのような欠陥を抱えておらず、意味の水源地モデルよりも妥当な言語モデルであると判断できる¹。この判断は、「きれい」でない言語事

¹ 本書は、実例などを〈観察事実〉として使用基盤モデルの妥当性に関する〈推論〉を行っ